

平成 27 年度 再生不良性貧血・MDS 委員会活動報告

2016 年 6 月 25 日

小児血液・がん学会 再生不良性貧血・MDS 委員会：2013 年 11 月改選

渡邊健一郎（委員長）、伊藤悦朗、大園秀一、小原明、小林良二、長谷川大輔、矢部普正、

1. 小児骨髄不全中央診断

- 中央診断の症例数は 1500 例を超えた。
- 中央診断により、**Refractory Cytopenia of Childhood** を導入した 2008 年版 WHO 分類の臨床的意義の検討を行っており、その成果は EWOG-MDS、ASH など国内外の学会で発表された。
- 小児骨髄不全症では、約 10% に先天性骨髄不全症の症例が存在することがわかり、その重要性が指摘された。疾患関連遺伝子解析、先天性造血不全ターゲットシーケンス（名古屋大学小児科）により先天性骨髄不全症の診断システムが構築されており、診断率の増加、実態の解明につながると考えられる。
- 症例数が増加しており、中央診断の在り方、今後の調査、研究の進め方について、検討することとなった。

2. 疾患登録症例調査

- 疾患登録委員会委員長をされている小原委員から、学会疾患登録の二次利用の提案が理事会で認められたことが報告された。これにより、疾患登録症例について、中央診断された症例を含めて、予後調査を行う研究が可能となる。
- 造血障害を始めとする小児非腫瘍性血液疾患、骨髄増殖性疾患については、持続的に実態、予後を把握する全国的な公的基盤を固めておく必要がある。疾患登録症例を対象とした調査も 1 つの方法と考えられた。

3. 委員会の今後

- 中央診断の在り方を検討し、活動方針を決定する
- 委員の改選を行う。